

東京日々新聞における石炭関係主要記事（I）

斉藤，俊彦
NHK資料センター

<https://doi.org/10.15017/13548>

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 1, pp.20-26, 1973-05-08. エネルギー史研究会
バージョン：
権利関係：

東京日々新聞における石炭関係主要記事(Ⅰ)

齊 藤 俊 彦

明六・五・廿八

江湖叢談 長崎県下の変事

長崎県管内高嶋に於て石炭礦営業中本月十六日午後一時頃図らず旧^キ窄^ナに堀当突然湖水涌出し為に砂石崩れ落ち堀人夫の中御国人男一人女五人即死其他軽重傷^{ケガ}く者許多あり、依之取敢ず其県より大藏省へ御届相成しと也

明六・七・廿三

公聞 第二百五十九号

今般鉦山其他諸坑業ノ規則別冊ノ通改定候ニ付テハ凡坑物ニ關係ノ事件ハ工部省ニ於テ總管セシメ候条自今金屬其外諸坑物営業ノ儀都テ同省へ可申立候此旨布告候事

別冊日本坑法略之

明六・十一・十八

江湖叢談

○土佐の国にては先年銅山を開きしより国民追々その利ある事を知りて新たに銅坑數ヶ所開きたりと云石炭坑も処々にあり近來有志の者ありて西洋の器械を用ひて大に是を掘出さんとて高智県へ届ケ出たる由之思ふに我國の産物は養蚕製茶にありと雖も他年我國の富強

を致す者は必らず銅鍊と石炭とにあるべし

明七・二・十四

北辺郵報

(前略)

全道産鉦ノ地固ヨリ少シトセズ本使鉦山開採ノ規則アリテ人民ノ求ムル所ニ從テ之ヲ允許ス抑物産ヲ興隆シテ開拓ノ資本トナスハ一大緊要ノ事ニシテ其品位ヲ査定シ其經費ヲ概算シ然ル後開採ニ從事シ輕率耗財ノ失ナカランヲ要ス故ニ専ラ意ヲ地質鉦屬ノ調査ニ用ヒ石狩以南ハ既ニ成功セリ石狩後志胆振渡島四国米人ライマン氏ヲシテ調査セシムル所ノ諸鉦屬其最モ著シキ者左ニ列スル所ノ如シ就中札幌郡ホロムイノ煤田ハ今其水準上ニ就テ測ル所ノ量一千万トンニ下ラス故ニ開採ノ日ニ當ツテハ得ル所必ズ之ニ倍スルアラント云フ石炭 岩内 概測一百五十万トン 但ナチュラルデレーチーデ、ノ最モ卑キ水準上ニ在ル者ヲ算ス下之ニ同ジ ホロムイ 既測一千萬トン

(中略)

石炭 鵜呂津 概測一千万トン 石崎村 概測二百廿五万五千トン
上湯沢 概測二千トン 鷲木 概測四千三百噸

(後略)

明七・五・七

江湖叢談

現今長崎ニテハ只石炭ノ外何一ツモ商業ニ成ルヘキ物ナシ而シテ石炭ノ下直ナル事今日ヲ以テ最モ甚シトス高島石炭一トン代金六円天草五円唐津四円半位ナリ是ヲ以テ西洋人は是ヲ上海香港等積ニニ送ル者多シ

明七・五・二十附録

公聞 歳入出見込会計表

第一表

明治七年歳入出并準備入出見込会計表

………(中略)

第九 臨時費 総計金七百六十二万六千百十八円

内訳

(中略)

高島石炭坑約定取消入費 金四十万四千円

(後略)

第二表

明治七年歳入出見込会計表

(中略)

第七 臨時費 総計金七百六拾二万六千百拾八円

(中略)

高島石炭坑約定取消入費 金四十万四千円

(後略)

明七・八・廿六

支那雜報

○上海香港等ニテハ是マデ重ニ日本ノ石炭ヲ買入レ蒸氣船其外工場諸機械ノ運転ニ用ヒシガ此タビ支那政府ヨリ布令ヲ出シテ此後堅ク日本石炭ノ売買ヲ禁ゼリ

支那政府ノ此令ヲ下セル只其愚ヲ見ルニ足ル彼レ若シ之レニ反シテ益々多ク我が石炭ヲ買ヒ蓄ヘ以テ火船兵船砲局等ノ用ニ備ハバ我が邦自カラ石炭ニ乏シク其価モ亦自力ヲ騰貴セントス且ツ支那国内未ダ石炭坑ノ盛ンニ発掘スル者有ラズ若シ日本石炭ヲ用ヒザル時ハ必ラズ大価ヲ以テ之レヲ洋商ニ買ハザル事ヲ得ザルベシ其策ノ下ナル又笑フベキノミ

明七・十一・四

○

北海道ヨリ寄セ来ル洋人ノ信書ニ云ク去年中追々北海道測量終リタリ石狩河ヨリ三里斗リニ日本国内最大ノ石炭山アリ(ホロモイ)ヨリ(ネロチ)マデ広ガレリ其實甚美ニシテ(磐前)ニ勝レリ而モ之ヲシテ能ク其功ヲ顯サシメントセバ石狩マデ運送車道ヲ開クヲ要トス蝦夷地ハ金鉱簇々タリト聞キ及ビシガ其レ程ノ事ハナシ其中最モ見ルベキハ胆振州内(トシベツ)河岸ノ野ニテ其広サ一里半方里斗リナリ平方三尺ニテ四セントヨリ五セントヲ出ス(ムサ)河岸(松前)ハ平方三尺ニテ三セントヨリ五セントヲ出ス江刺ニモ少シク其模様アレドモ大ニ手ヲ下ス程ニハ非ラズ十勝ニハ最美ノ礦アリトテ榎本氏去年夏中此ニ留リ沙石ヲ淘汰セシメタリ……以下略

明七・十二・廿

○

地球上石炭坑最も多クシテ其利ノ大ナルハ英國ニ及ブ者ナシ故ニ英國産ノ石炭ヲ購求セザル國ハ甚ダ稀ナリ然ルニ近頃(ロシヤ)國ニテ石炭坑ヲ発見セシヨリ地中海東南ノ諸州及亜細亞地方ノ諸國ニテ新ニ(ロシヤ)ニ注文シ是マデ英國ヨリ運輸セシ者ハ又此地方ニ要セザルニ至ルベシ今爰ニ(ルタン)新聞ヨリ摘訳スル事左ノ如シ(ロシヤ)ハ前々ヨリ其内國用ノ石炭ハ多ク之ヲ英國ニ求メシナリ近頃西境(コサック)ノ地方ニ於テ深サ百八十尺ノ石炭坑ヲ発見シ其實諸用ニ供シテ最も美品ナルヲ以テ既ニ六十噸余ヲ発売出シタルドモ採取ノ法未ダ抄取ラザルヲ以テ盛大ニ輸出スルニ至ラズ蓋シ此地ノ土民ハ鉞穴ヲ掘ル法其他鉞山上ノ諸術ニ明ナラズ且ツ此辺ノ人口ハ未タ稀疎ナルヲ以テナリ然レドモ(ロシヤ)政府ヨリ此事ニ付キ現今既ニ力ヲ尽セルヲ以テ不日ニシテ一般ノ規則ヲ精定シ隨テ盛大ノ業ヲ起シ日ヲ追テ英國ノ石炭ト其利ヲ競フニ至ラン果シテ能ク斯クノ如クナルトキハ日本支那印度等ノ如キハ英國ヨリ不廉價ノ石炭ヲ求ムルヲ用ヒズ其需ヲ(ロシヤ)ニ資ルナルベシ又(スエス)海峡ノ通船モ之カ為メ其便利ヲ得ル事必セリ(エコジュジャポン)

明七・十二・廿九

長崎景況

(前略)

○高島石炭坑は曾て英人ガラバより天朝へ御買ひ上げに相成りし処此節蓬萊社へ御払らひ下げに成り引き渡しのため山尾工部大輔吉井工部大丞伊東鉞山助鉞山教師ゴットフレー氏其他数人出張あり蓬萊社よりは受取りとして後藤前參議真田前海軍大丞青木某等出張せり

(後略)

明八・九・十

○

浅草旅籠町の大都賀喜右衛門と云ふ人近ごろ越後の国より歸りての咄しに此國は産物多くして実に天然の富を成せり石腦油の涌出するばかりにても是を精製すれば日本全国を潤はすに足るべし其ほか第一米あり生糸あり茶ありと云へども近ごろ開きたる蒲原郡赤谷山の石炭鉞の如きは盛んなりと謂つべし此山は去ル明治三年に新発田の石井良太郎が発見せしより既に六年の星霜を経て多少の艱苦を甘んじ勉強して是を開掘せり其鉞山の略を記さば峨々たる山間の巖石を切り開くこと二十五町にして坑口を一尺に定め五十間の深サに入て道を八方に分ち中央に空氣を通ずるの穴を付け掘り得る所の石炭を引出すこと山の如し此鉞脈は陸統として山を越え谷を亘りて尽る処を知ること無 其石炭の品柄は最も上等にして唐津高島の下に在らず是を運ぶこと水陸十二里にて新潟港に出し其価は百斤に付き僅かに二十八錢なり是を掘ること斯の如く艱難にして其運送も亦近からざるに何を以てか能く斯の如く廉價なるやと問ふに此社中の人々は元みな士族なるが方今四民みな其力に食の時世に当り座食して報國の心なきは志士の耻る所なりとて各々奮発して自から器械を取り或は担ひ或は負ひ或は船に棹さして僅かなる賃金を以て衆心一致に尽力し社長は是に先率して勉強する故この社を号して精誠館と稱する程の次第に付き価も廉に売るゝなりとぞ是に依て近ごろ新発田の白勢成熙と云ふ豪商その社の精誠なるに感じ力を添て其不足を補なはんとするよし若し然らば金力も十分に備はります 開掘を盛大にし加治川の船路を開かば石炭の価も弥々下直に至り蒸氣船の廻

漕を便にし其他百工の製造を助くるに至るべし人みな北越の物産を
数ふるに米と縮の外には女郎と覚兵衛獅子に指を屈すれども眞の物
産は漸やく此ごろ地中より目を出し掛けましたとの事なり

明八・十二・六

雑報 一昨四日午前七時長崎高島石炭坑内十一番の瓦斯が破裂し怪
我人二十九人即死十五人生死いまだ分らざる者十三人なりと云へり
驚嘆の至りなり

明九・三・四

公告 石炭は国の力にして開明の強国と雖も船車は不俟論種々の機
械を働かすべき石炭に乏くは恰も人に力の無と同じ事なるに幸ひ
にして吾邦は上等石炭が各地から産て外国へも輸出す程あると言ひ
歡喜しい事也僕は前年より石炭売捌を営業と致し追々愛顧を蒙り日
増に繁商仕難有仕合に存ます尚又今般小売をする事を開業ました故
ストープ及び西洋料理等に御用ひの節は郵便を以て御注文被下次第
一二俵にても早速御届申上ます価も精々易く働き其他許多の御注文
は一層廉価に差上ます間多少に不拘御用向を仰付られるよう翼上候
也

各種石炭売捌所 靈岸島越前堀町二丁目三番地

福 山 伊 十 郎

明九・三・九

雑報 築地入船町一丁目の杉山金兵衛と三河町二丁目の服部源七の
兩人は近ごろ相模のくに足柄上郡川西村に於て大いなる石炭山を見
出し試み掘りを願ひ出たるに規則の通り一ヶ年の免許を得て先月よ

り掘り始めたるに其辺は総て石炭山にて何処を掘ても能い石炭が沢
山に出そうな塩梅だとの評判なり

明九・三・十五

雑報 去ル二月二十七日に高島石炭坑の器械が損じて容易ならざる
妨碍を生じたるよしその委細は未だ分らざれども最はや其修覆は六
かしき程なれば新規に拵へねば成るまいとの評判なり先達ても瓦斯
気の破裂に依り非常の損害を生じ今又この災難に逢ふは不運と云ふ
べし併し不慮の災難は逃れ難き者なれば此坑もいよ盛大なるに
随つて災害も亦ます多きに至らん(ライシングソン)

明九・三・十六

雑報 昨日の雑報に高島石炭坑の器械が損じたる由と記しましたが
猶よく聞糺すに坑口に居たる石炭を外へ捲き揚げる器械の心棒が折
れたるにて廿日ほども掛りたらば修覆も出来上りませう其間は人足
にて担ぎ出しさへすれば更に差し支え無く石炭の出かたも以前に異
ならず世上には潮水が押し入りたり杯の風聞あれども全く虚誕なり
本月二日までは日々百トンづゝ担ぎ出すと申します是は二月廿八日
の電報と本月三日の文通に拠る

明九・五・十一

雑報 去月二十八日に高島鉾山の一坑より石炭七百三十五噸を掘出
したと云ふことを聞きました但し此鉾穴より一日に是ほど大層の石炭
を掘出したるは初めてのことならん思ふに此鉾坑の産物は世界中の
諸鉾山に比較しても随分上等の部なるべし此鉾山の利益は実に洪大
にして支配人等の尽力もまた容易ならず是ほどの実益ある例を見

ながら日本政府は外国人が日本国の鉱業に付て見込たる方法を許容せざるは誠に怪しむべきことなり。(ヘラルド)

明九・五・廿四

雑報 皆さま御存じ此国に名高き蓬萊社も是までいろ／＼と風説も有りましたが此度はいよいよ閉社に成たと見えまして蓬萊橋辺に巍然として天に聳えたる高館も石庫も去ル二十一日に該区務所に於て蜂須賀家へ譲り渡しに成りましたと記し居たる処へ又一人の客ありて云ふには蓬萊社は閉社と云ふ訳では無し木挽町の高堂大厦を外へ譲り渡して結社の仕法を改革し従来の負債もそれ／＼消却の法が付きたる由なれば是からは只高島石炭坑の事ばかりに成るのだとか申し升

明九・八・二

敦賀丸ノ報告

前略

牛莊の輸入品は大抵天津に同じく石炭は多く相捌け不申該港に於て石炭を用ふる者は蒸汽船一艘及び在留外国人数人に過ぎずされども石炭の価頗る高く高島石炭の価は十五弗なり 以下略

明九・八・五

雑報 益田孝君は三池の石炭鉱を見分の為めに先ごろより九州に下りしが一昨三日に東京に帰られました

明九・八・七

雑報 高島石炭坑内に変ありし趣きを伝聞致せしに因り早速探訪をとげたりしに凶らず後藤象次郎君の代理竹内綱君より鉦山寮へ御届

になりし書面の写を得たるにつき大意を抄撮して左に掲ぐ

高島石炭坑七月廿五日午後ヨリ中蒸気卸シ十三番片警十五片警辺烟気相覆ヒ空気の流通ヲ塞ギ熱氣甚數ニ付其原因ヲ取糺候得共不相分候間坑内西部ノ入坑差止メ吸筒ヲ以テ水ヲ灌ギ或ハ空気がノ開閉ヲ為シ百方手ヲ尽シ候得共廿八日ニ至迄同様ニテ烟相減ゼス依然タル景況ニ有之教師マーティン氏ノ考案ニハ該所ニ悪炭并ニ坑道修繕ノ節掘出シ候石炭積置有之ニ付一時空気がノ流通ヲ塞ギ自然火ヲ生スルノ景況ニ可有之趣申出候旨廿八日付ノ書状ヲ以テ報知有之其後本月一日十三番片警火ヲ発シ候得共坑内東部ニテハ炭取致候旨電報有之同日消火難致ニ付十三番ヨリ坑内西部ニ水ヲ溜ル旨ヲ電報有之昨日十五番片警火盛ニ付一時坑内ノ入坑ヲ差止メ消防ニ取懸リ候趣電報有之候ニ付不取敢此段御届申上候云々

明治九年八月五日

右の報を得るや直に之を殖字掛に廻し既に整正の際又もや一電報を得るあり併せて録す(五日午後四時五十分発同八時東京着)

三日の夜。消す事止めて。十五片警の焚口をふさいだれば。昨日は。火穩かになつたから。二所にパイプを附け。スティムで消す趣向中。夫で消えねば。十一番片警まで水を入れて消すつもり東は炭取初めた。早く竹内下るを待つ

明九・八・十九

雑報 此のほど記したる高島石炭坑の火事は去る十二日の長崎新聞を見るに同所の外国人も日本人も一生懸命に働けども未だ鎮火せずとあり尤も後藤象次郎君は本月上旬に火事の電報を聞かや否や直に乘船して彼地に赴れみづから消防の指図を致さるるよしとぞ

明九・八・廿二

雑報 高島石炭坑の出火は日夜消防に手を尽せども未だ消ざるよし追ひ火勢強く坑内稼の者も一昼夜に二三十人ばかりづゝ火気烟臭の為に氣絶し又は怪我をするもの有り併し直に引き上げ医療を施すゆゑ死する程の者は無し坑内の寒暖計は百二十度ぐらゐなれば三十分ばかりより働けずと本月十二日の西海新聞に見えたり其後また十五日の新聞に坑内の火は未だ消えず去ル十三日に後藤象次郎殿が洋人兩名を連れて長崎へ着せられ十四日に高島に行れたとあり升から其うち鎮まり升で五座りませう

明九・九・一

雑報 高島石炭坑の火事は新聞にもたび／＼出て何時まで焼るか分らぬとの評判なりしが去ル二十四日の午前十一時ごろ迄に坑内へ汲み込みたる水がとう／＼九段方番と云ふ所まで一盃に成り全く鎮火したと申し升それに付ては少々の入用は掛る様子なれども最はや遠からず元の通りに石炭が出る様に成るだらうと申すことなれば先々安心

明九・九・十五

雑報 後藤象次郎君は高島石炭坑の出火に付き先ごろ彼地へ行れしが十日ばかり前に全く鎮火したるに依り東京丸にて昨十四日に帰京せられたり出火の日より鎮火まで凡そ廿五日の間だ焼け通しなりしが後藤君が着島の後は長崎中にあるポンプを以て諸口より潮を入れ必死を極めて消防せしかば漸やくにして鎮火せりとぞ此騒ぎにて一時は長崎市中まで不景氣なりし由

明九・九・廿七

雑報 高島石炭坑にて消防のため注ぎ入れたる海水も二ヶ月ほどの内には汲干て元の如く石炭を掘り出しに取掛る由

明九・十・三

○此度北海道御巡視のお咄しを聞に三条寺島伊藤の諸公を始め一行の人々八月六日に横浜御出帆にて途中釜石へ御立寄り鎮釜山を御覧に成り八月十一日に函館へお着に成りて夫より近傍処々御巡覽あり船にて西海岸へ御廻に成り小樽へ御上陸にて夫より札幌へ御越しに成るホロムイは石川川の上流に在り此辺は蛇多くして大に行人を悩すよし伊藤公は蒸氣弘明丸にて此川に溯ぼること廿里にして夫より又小船にて十里余も上り空知郡ホロムイに至り此処の養蚕所并に石炭山を御覧に成りたり此処より上品の石炭多く出ることとは以て北海道を富すに余れり魯斯と交換に成りたる樺太の土人は此処に移住せり追々石炭坑の盛んなるに従がひ皆その事に使役するに足るべし

後略

明九・十・九

附録 前年より石炭売捌を營業仕候所御愛顧を蒙り難有奉存候尚又ストーブ及西洋料理等に御用ひの為石炭小売仕候間郵便を以御注文被下次第一二儀にても早速御届可申上候且精々廉価に相納候間多少とも御用向被仰付候様翼上候也

靈岸島越前堀二丁目三番地

各種石炭売捌所 福山伊十郎

明九・十・二十

工部省録事 第拾八号

諸鉦山試堀借区等之願書難形日本坑法中掲載有之候得共地名其他ノ
認方疎漏ヨリ間々推問ノ手数ヲ費シ不都合不少ニ付今般更ニ願書難
形別紙之通改正候条図面相添正副式通可差出此旨布達候事

明治九年十月十九日

工部卿伊藤博文

(願書難形別紙省略)